

高山

たかやま
高山の原生林を守る会

会報 第 100 号

創立 30 周年記念号

2017 年4月



ブナの大樹が逝った

読み人知らず

高山のブナ林の主が倒れた

二十年前、主は逞しい腕を天空に突き上げ
僅かに残ったブナ林を席卷していた

主は千年越しの大地の鼓動に耐え切れず倒れた
主は天命を全うした、大往生であった

ぽっかり空いた空間の底に横たわる躯体
その姿を見たものはそうつぶやくに違いない
主は土に還り、あの森は次世代に託された

主の冠の周りではニホンザルが戯れ

大樹の根元で幼児がウサギのしぐさで答えた

あの森は、もう存在しない

しかし、あのひと時は、親子の脳裏に永遠に宿る

悠久の年月を超えて、孤高に倒れたブナの大樹

私たちの集いは今も、自然と関わりを保ち続ける

あの森の姿を過去の歴史と走馬灯にしないためにも
限られた時間の中で、次の世代にブナの森を引き継いでゆきたい



仁田沼雪上にてケヤキのコロニーを背景に
かんじきをはいて登山開始。雪はまだ一面に残っていますが、雪はもう春雪。日差しもまた春の日差し。

天気も上々で、風もほとんどなくまさに観察会日和です。ただ観察する植物が多く、一向に進みません。だいぶ時間がたってもまだ登山口から2～300メートルくらい。春の快い陽気につられてか、守さんの口調もいつも以上に滑らかです。花はまだ何もないと思っていましたが、雪の中から飛び出ている枝には冬芽がついており、カエデ類の冬芽は先端が1個のものと2個のものがあるとの説明がありました。カエデはいつ聞いても種類が多く難しい！また雪上の観察会ならではの観察対象として、アニマルトラックがあります。ふかふかの新雪というわけではありませんでしたので、足跡がくっきりではありませんでしたが、きつねやリスと思しき足跡は観察することができました。またリスの食事のあとに残った松ぼっくりの残骸の「えびのしっぽ」はたいへん印象的でした。

なだらかな丘を越えて、仁田沼への斜面で、ヤドリギを見つけました。ヤドリギは冬の氷雪の中でも緑色を守ったことから幸運をもたらす聖なる木とされていてとても縁起の良い植物です。今回みんなでつけることができたヤドリギは150回観察会への森からのお祝いメッセージのようですね。仁田沼は先週下見に来た時に比べてもだいぶ沼の周囲の雪は少なくなっており、春の足音を感じました。沼畔にて集合記念撮影。沼から少し高台に上ったところで雪上観察会ならではのスコップで雪のテーブルを作ったの昼食です。沼周囲は窪地になっているせいか風は穏やかで本当に気持ちのよい昼食でした。

ここからはペースをあげ、一気に男沼に。周回コースを進みましたが、先週はとおれた場所もすでに雪が解け、通ることができなくなっていました。ここから引き返しふたたび日向に向かいます。途中、道筋に沢が流れていましたが、雪解けがしっかり進んでいることがわかりこんなところにも春を感じることができました。2時ちょっとすぎに無事下山。気持ちの良い日だまり春のハイクでした(平成29年3月5日)。

今回は、ダンナ、飛び入り参加のダンナの友人と合わせて3人で参加させていただきました。ダンナの参加は本当に久しぶりです。さて今回の観察会は通算150回目という節目の記念すべき観察会とか。こんな大事な観察会の報告を書かせていただくことになり本当に恐縮です。

さて例によって四季の里付近の駐車場で集合後、今回の参加者12名は、2台の車に分乗して土湯温泉の奥、日向の登山口に向かいました。登山口からスノーシュー、和



この冬芽は



これは巨木だ！



陽だまりの雪上散策



雪のテーブルでの昼食は賑やか

特別寄稿 弥兵衛平の環境保全活動をふりかえる（3）

ネイチャーフロント米沢 代表 青柳和良

3. アヤメ平と比較して

私たちは2004年にネイチャーフロント米沢(略称:NF米沢)を立ち上げ、弥兵衛平における裸地化した泥炭に植生を回復させる事業を山形県から引き継ぎました。そして前号で触れたように、最初の播種試験が失敗したのはマルチング素材として用いた植生マットの劣化が早く、3~4年で被覆効果を失ったためであろうと考えました。したがって2004年の播種作業後のマルチングには、馬場谷地で実証済みの耐久性の長い緑化ネットを1枚または2枚用いるやり方を試みました。

一方、NF米沢ではこの年の作業が完了してから尾瀬ヶ原に隣接するアヤメ平の視察を行いました。その結果は私たちの2005年度以降の作業に重要な示唆を与えるものでした。視察内容をNF米沢の2004年度報告集から抜粋して以下にご紹介します。

10月7日(木)、8日(金)の2日間、尾瀬・アヤメ平の植生回復事業を視察した。

その契機となったのは菊地慶四郎著「尾瀬・アヤメ平の40年」(2004年4月)をNF米沢会員、石栗正人氏より紹介され読んだことである。

尾瀬・アヤメ平は、40年ほど前までは尾瀬人気で押し寄せた登山者の踏みつけにより著しく荒廃が進み、その後国や関係県、民間ボランティア、東京電力などが相互に協力しながら植生復元に取り組み、ようやくその成果が認められるようになってきたところとして知られている。アヤメ平は弥兵衛平と地形的に良く似ている。どちらも東西に長く、南北に緩く傾斜する広い尾根筋にあり、標高が2000mに近い。実際にはアヤメ平の最高点は1968.8mあるのに対し、弥兵衛平はおおよそ1830~1860mほどであるが、緯度の違いを考慮すると環境としてはほぼ同等と考えてよいだろう。当然植生も似ている。私たちは手探り状態にある弥兵衛平の植生復元事業にとってアヤメ平の経験に学ぶことは非常に価値があると考えた。

視察参加者は3名であった。10月7日の午後、本の著者、菊地慶四郎氏を沼田市の自宅に訪ね、事業の経過や参観すべきポイントなどをお聞きした。翌8日朝から台風接近による不安定な天候を押して登山し、吾妻山では考えられない大規模で息の長い復元事業を目のあたりにした。いくつかの重要な情報を得ることができたが、直接目にし、参考になると思われた事項をまとめると次のようになる。

(1) 最も効果的な方法は、ミタケスゲなどを播種した後、むしろ(藁ごも)で被覆し竹棒で押さえるやり方であり、現在最も広く採用されている。(右の写真)

(2) 植物群落をブロック状に切り取って移植する方法は、結果的にいろいろな問題があり、現在あまり行われていない。かつて行われたところも、移植されたブロックを再度切り取って一箇所にまとめ、切り取られて裸地化したところを平らにならして(1)の方法で復元を図っている

(3) 最適な方法を見出すまでに、基礎的な調査・研究および試行錯誤をじつくりと繰り返している。そのために国、県、企業(東京電力)などは巨額の経費をつぎ込んでいるものと推察される。



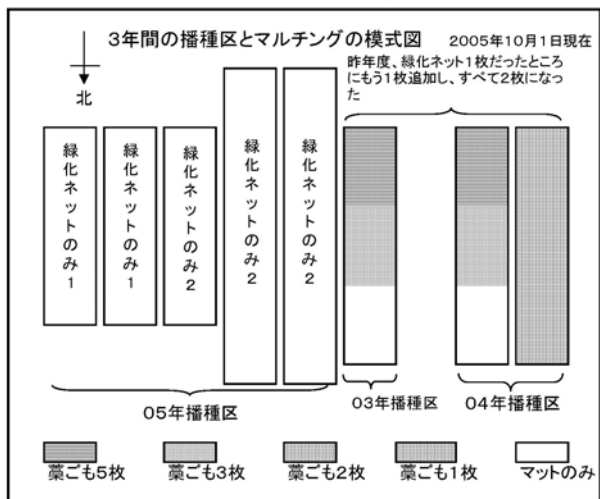
裸地化した泥炭に現地植物の種子を播き、藁ごもでマルチングするやり方は、私たちが弥兵衛平で取り組み始めたやり方と基本的には同じです。しかし前号最後に記述したように、播種翌年の雪解け後に見た凍上被害はなぜ起きるのか、どのような対策を講じればよいのか、という課題を突き付けられました。そして分かったのです。あやめ平では遅霜被害はほぼあり得ないのです。なぜなら、あやめ平の冬季積雪は4mにおよび、その雪は6月まで残るため、植物の生育期間が3か月ほどしかないのが悩みだと著者は述べておられました。

私の手元には、私が若い頃、米沢興譲館高校の生物クラブの生徒たちと吾妻山に通って種々調査した資料が残っていました(注5)。それによると、弥兵衛平の積雪は冬の強い季節風で吹き飛ばされるため非常に少なく、4月末(ゴールデンウィークの頃)には消えています。この季節なら山上では氷点下の気温がしばしば訪れ、霜柱による厳しい凍上が起こると推測されます。つまり、弥兵衛平とあやめ平は地形と標高が似ていても雪を伴う季節風の影響が異なり両者の積雪量と消雪時季の違いを生じていたと考えられます。荒廃した湿原の植生回復という同じ目的を持った活動であっても、それぞれの山の環境には個性的な特徴があり、その特徴を把握しなければ目的は達せられないという貴重な教訓を得ることができました。

(注5) 山形県立米沢興譲館高校生物クラブ: 吾妻山の非森林群落について(1966年)

この論文は同クラブOB・OG達によって2016年に復刻版としてよみがえりました。

第1植生回復区の2005年度播種作業において、凍上防止策として新たなマルチングテストを開始しました。(図、次ページ)



2005年10月1日播種の日

前年(2004年)に播種してこの年の春に発芽した2列に防霜用の藁を被せた。写真は左が南側



2005年10月1日播種の日

写真手前の1列は2003年播種区で北端は藁なし。奥の5列が05年播種区で、藁なし。

上の2枚の写真は上記のマルチングの模式図と同じ現場を示しています。この藁によるマルチング効果は翌06年の発芽と成長の結果によってある程度判断できました。ただ、06年春の消雪後の霜害があまり厳しくなかったのか、藁被覆をしなかったところでも発芽・成長が比較的順調だったので、藁の効果を十分には実証できませんでしたが、藁は2枚掛ければ凍上被害を防止できそうだという状況把握ができました。



2006年6月8日 04年播種・藁なし区

春の芽出しは順調で、凍上被害はほとんど見られなかった。



2006年6月8日 04年播種・藁3枚区

藁3枚を外した後にややもやし状の新芽が伸びていた。夏までに正常に成長した。

この年の秋の播種作業から、初めての播種区は緑化ネット2枚のみで被覆し、前年度またはそれ以前に播種して幼苗が生育しつつあるところでは既設の緑化ネット2枚の上に防霜用の藁を2枚追加被覆することがマルチングの基本パターンになりました。第1植生回復区はこのようにして2009年度に播種・マルチング作業は終了し、より複雑な荒廃地を抱える第2植生回復区に取り組むことになります。(以下次号)

我が家の自然観察 2

小学生の自然観察

河上 鏡治

2017年 2 月 3 日

その 1 水耕栽培

「万能ねぎの白い部分を残し、水の入った容器に差しておくと青い部分がまた伸びて何回も食べられる」と聞いてコップに水道水を満たし、食べ残りの根をコップに差しておきました。数日後気が付くと白い部分の芯から青い葉が伸びていて、蕎麦の薬味として利用することができました。さて 3 代目はどうか。出てはきたものの大分貧弱なものでした。同じ葉物の三つ葉ではどうか。写真のように新葉が生じました。当然ながら植物は 光のエネルギーによって空気中から摂取した炭酸ガスと根から吸収した水分から炭水化物を作り出す炭酸同化作用によって成長するのであり、現にトマトなどは全自動の工場化による生産がされています。

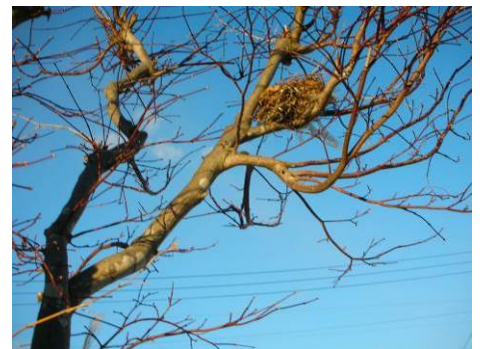
今回の水は単純な水道水でしたが、これに肥料を混入すれば 3 代目も立派な葉が出るのではないかと思います。



三つ葉の水耕栽培

その 2 生ごみカボチャ

我が家では生ごみは土と交互に重ね合わせ、コンポストとしています。生ごみの中には当然野菜の種もそのまま捨てられています。これらの種は発芽しコンポストの栄養分を十分に吸収したくましく成長しています。その最たるものはカボチャで毎年いくつか採取されています。大変美味で、あの小さなごみの種から、生ごみの水分、肥料分を吸収してどうしてこのような実になるのか、自然の仕組みの妙に感心しながら唯のカボチャを頂いています。



小鳥の巣 我が家の庭で 節分の日

その 3 小鳥の巣

2 月に入って降雪の上がった日、しばらくぶりにのんびりと庭に出てあたりを眺めると、木の枝の二股のもとにごみの塊のような物が見られました。近寄ってみると小鳥の巣でした。親鳥の出入りも無く、鳴き声も聞こえません。雛はすでに巣立ち、空巢なのだろうか。木に登って確かめるのも腰痛の老体では危険で下からの写真で証拠としました。前年のスズメバチの巣と違って平和で自然豊かなものでした。



小学生の疑問 鳥の舌（酉年にちなんで）

鳥は舌がないので水を吸い上げることができず、一旦水を口に含み、首を後ろにそらせて喉に流し込むのだと聞いていました。だがお伽噺の「舌切り雀」では、舌があったから切られたのでしょうか。

鳥には舌のある鳥と、無い鳥があるのでしょうか？ またはお伽噺の作者が舌の有無を知らずに、話を面白くするため作ったのでしょうか。教えてください。



舌はありそうですが、機能は不明

東北ブナ紀行（61）

奥田 博

今回紹介するブナの2山に登山道は無いいため登るには積雪期に限られる。その分、自然度が高いかといえば、必ずしもそうではない。日本の山麓は人工林に覆われていることが多い。こんな山の中にまで？と目を疑いたくなる林を越えれば感動の自然林やブナ林が現れる、演出が用意されている。

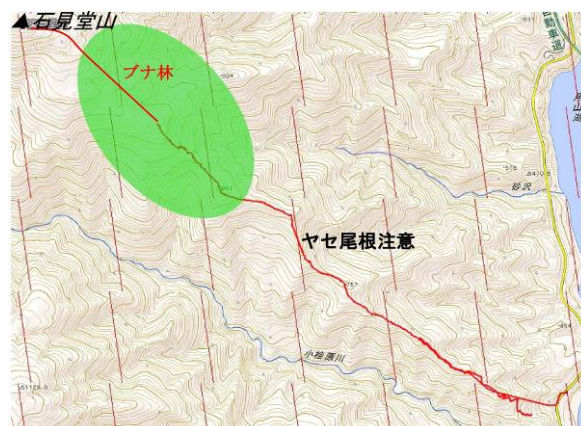
87) 石見堂山 1287m

朝日連峰と月山を結ぶ尾根の外れに石見堂山はある。もっと奥には赤見堂山が高く聳える。以前に天狗相撲取山から障子ヶ岳を経て、赤見堂・石見堂をGWに歩いたことがある。雪はタップリとあって、稜線は白かった。しかし高度を1300mまで下げると立派なブナ林が現れた。

そんな好印象を抱いて、石見堂山に直接取り付いてみた。ルートは大井沢に近い月山湖の脇。しかし尾根に乗るまでは急坂の連続に喘いだ。雪も薄い個所があって、ルート取りが難しい。尾根に乗ると何と杉林。これも急な斜面を上がると、スッキリとした狭い尾根歩きとなる。次第にブナも顔を出す。この辺はまとまったブナ林ではなく、みるべき一本ブナも少ない。やがて痩せた尾根に差し掛かる。クレバスもあって通過は困難な個所も、回り込み、遠回りしながら何とか越えた。

すると、見事なブナ林が現れる。遠く月山も見る余裕が出てくる。急だが広い尾根はブナ通りともいえそうだ。展望のブナ台地を越えると山頂だった。山頂には大石があって、遠く真白な赤見堂山はじめ大展望が広がる。

コースタイム：登山口（20分）尾根（1時間10分）ヤセ尾根（1時間）山頂



厳しい狭い尾根を越えれば穏やかな尾根にはブナ林が広がる

88) 大頭森山 984m

朝日連峰の最後の集落である大井沢に住んでいたマタギの志田忠儀著「ラストマタギ」（角川書店）は、当時のマタギの生活と文化、朝日連峰の様子がドラマチックに描かれた本だ。その志田忠儀さんは昨年100歳で亡くなった。冬はウサギを撃ち、春先はクマを撃ち、春はゼンマイなどの山菜採り、夏はイワナを追い、登山道の整備、秋にはキノコ採り。自然を守ながら自然と共に暮らすことを貫いたその人生は、アップレ！ラストマタギは、また文化の喪失でもあった。

志田忠儀さんの民宿『朝日山の家』の前を通り過ぎると、間もなく道は雪に阻まれ、ここから歩き出す。目指す大頭森山には東側の林道から夏道が開かれており、10分程の道中でブナを楽しめる。今回は西側から登るが、目指すは一本ブナ。急な谷を抜け、杉林を抜け、アップダウンを繰り返すと林道のような道形が現れ、それをたどって北に向かうと異彩を放つ一本の大ブナが見えてきた。その存在感は、志田さんを重ねずにはいられなかった。この日は、このブナの下でコーヒーを飲んで、ゆったりとした時間を過ごした。

コースタイム：登山口（1時間30分）大ブナ（50分）登山口



異彩を放つ大ブナはブナ林の中でも特に目立った

ガクウラジロウラク (*Menziesia multiflora* var. *longicalyx* ツツジ科ヨウラクツツジ属)

ブナ林から亜高山針葉樹林帯に植生する落葉広葉樹。日本固有種。日当たりの良い高層湿原周辺や林縁の湿った場所を好んで群落を形成する。本種はウラジロウラクの変種で花冠に明瞭な萼片を有する。ガク片の長さは連続的に変異するためウラジロウラクとの識別が困難な株もある。吾妻・安達太良連峰ではガクウラジロウラクの頻度が高く、ウラジロウラクの植生は少ないようである。

葉は互生である。枝の先端に4、5枚の葉が輪生状に着葉する。葉身は楕円形で先端に赤色を帯びた球形の腺状突起を有する。葉縁は細かい鋸歯があり、白毛が着生する。葉色は、表側が淡いエメラルドグリーン、裏側は粉白色を帯びる。特に若葉の色合いは独特で、他のツツジ類にはない気品がある。葉身の表裏に白毛がまばらに着生する。葉柄も有毛である。

花は頂性で茎の先端から放射状に長い花柄を伸ばし、4～10個程度のベルフラワーを咲かせる。花冠の形は同属のコウラクツツジとは対照的で胴の長い端整な釣鐘型で先端は5裂し、裂片は反転する。雄しべは10本である。萼片は5枚である。萼片および花柄には腺毛が密生し、その先端の球状の赤い突起が美しい。花冠の色彩は鮮赤から紫がかった淡桃色まで株により微妙に変化する。

ガクウラジロウラクの花芽は発芽後、鱗片が脱落すると数枚の総苞片がクリーム色に変化し、まるで黄色いバラが咲いたような景観を呈する。その花心(?)部を注意深く観察すると、紫色の花蕾が覗いて見える。やがて、花柄が伸長し、真の花冠が露出する。登山の魅力に取りつかれ始めた頃、残雪が点在する春山でエメラルドグリーンの葉を持ち、小さいバラの様な黄色い「花」を着けた花木に出会った。しかし、その「花」を掲載した図鑑は存在しない。その理由が分かるまで数年を要した。今でもガクウラジロウラクの出蕾直前の姿に着目した解説書は見られない。ガクウラジロウラクの化身を楽しんでいるのは私だけかも知れない。



アカネスミレ (*Viola phalacrocarpa* スミレ科スミレ属)

コナラ林からミズナラ林に植生する多年草。アオイスミレ、スミレ、タチツボスミレ、ニョイスミレ(ツボスミレ)、ニオイタチツボスミレと並んで環境適応性が広いが、日当たりの良い比較的乾燥した場所を好むようである。吾妻・安達太良山麓では大きな群落を形成することは少なく、数株が点在することが多い。スミレ、ニオイタチツボスミレ同様、地下茎が無いタイプである。株全体が白い短毛で被われるのが特徴である。スミレ類にはノジスミレ、ヒメスミレ、アリアケスミレ、コスミレの様に吾妻・安達太良山域では見られない人里多産型のスミレがある。アカネスミレは、ミヤマスミレの仲間に分類され、標高は高くはないが、山地性の分布を示す。アカネスミレの毛のないタイプであるオカスミレは吾妻山麓では見られず阿武隈山麓等の人里を好むようである。



葉は対生。スミレ類の葉形は大きく分けるとスミレに代表される長三角形とタチツボスミレの様な心臓形に分けられる。本種はその中間型で変異が多い。葉柄には翼が見られる。葉の両面は短い白毛で被われるため柔らかな質感を呈し他のスミレ類とは明瞭に異なる。葉縁は緩やかな鋸歯がある。

花は腋性。葉腋から複数の花柄を立ち上げ、やや赤みを帯びた青紫の花を咲かせる。花弁と花柄には白毛が密生する。側弁、上弁、唇弁ともに条線が明瞭で、側弁基部には鮮白毛が着生する。距も細毛で被われる。上弁と側弁は基部が広がらず雌しべが隠れる。雌しべの先端はかぎ型である。花には微香がある。

花色が命名の由来であるが、「茜」色は赤系の色彩であり、少なくとも吾妻・安達太良山等の奥羽山系で確認されたアカネスミレの花色は青系で決して「茜」色を連想するものではない。残念ながら私は赤系を連想させるアカネスミレは見たことがない。アカネスミレがスミレとの対比で命名されたとすると、確かにスミレの花色に「茜」色を混ぜるとアカネスミレの色合いになるような気がする。アカネスミレの青みが雪深い山岳地帯の早春の光や土壌の化学性に関係しているのではないかなどと思案を巡らせている。アカネスミレに出会うたびに色彩と名前のギャップに悩みつつも花色の不思議を楽しんでいる。

創立30周年記念寄稿集



30周年を迎えて

佐藤 守

設立30周年を記念した自然展の来観者から「高山の原生林を守る会」が30年も続いていたことに対する感嘆の声が寄せられた。

「高山の原生林を守る会」は1987年5月25日に福島市中央公民館にて設立総会が開催され正式に設立された。会の目的は福島市が3月5日に明らかにした吾妻連峰の一峰である「高山」に計画された吾妻山麓スキー場開発に反対することであった。当時、東北の山々は種々の政策的施行による森林伐採が計画され各地で森林伐採に反対する市民運動が起きていた。福島県では二岐山のアスナロ林の伐採に対し疑問視する声があがっていたが、大きな話題には至らなかった。そんな中で燎原の火のごとく広がった「高山スキー場」反対運動を指して、自然保護後進県の福島県にも遂に「緑の黒船」が来襲したと言われた。折しも白神山地が世界遺産に指定されるに至り、東北のブナ林は時代の寵児となり、高山スキー場計画も白紙撤回となった。

「運動」を目的に設立された市民団体が30年間継続することは通常はありえない。「高山の原生林を守る会」は設立以来、会報も継続発行されていることに象徴されるように毎年、会としての事業が実施されて現在を迎えている。善意を前提にした市民団体である限り、会員の共鳴と参加、そして相互信頼がない限り、事業を実現することは不可能なことである。会の自然保護活動としては2002年～2007年の6か年に亘る鳩峰峠牧草地への植林作業、2001年から現在に至る西吾妻山域を中心とする登山道保全ボランティア作業がある。また、2011年からは山岳の放射能汚染調査にも取り組んでいる。しかし、会員の信頼と共感を得ている「高山の原生林を守る会」の重要な活動として「自然観察会」を無視することはできない。

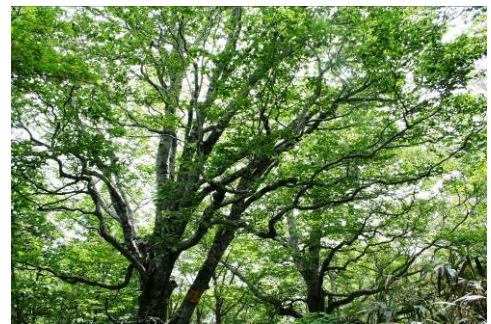
「自然観察会」は、反対運動の一環として不定期に高山周辺を中心に開催されていたが、1995年より定期化された。これは、1994年に開催された東北自然保護の集い秋田大会での湯田町の瀬川夫妻との出会いがきっかけであった。瀬川夫妻はカタクリの会を立ち上げ湯田町と沢内村周辺の自然観察会を展開していた。当時の「高山の原生林を守る会」で現地調査などの実務を担っていた事務局は山岳会関係または登山愛好家を中心となっていた。「木を見て森を見ず」どころか「道をみて木すら見ない」状態であった私達にとって自然観察会を中心に据えたカタクリの会の活動は新鮮であった。

高山スキー場反対運動は1991年に林野庁より「吾妻連峰」が森林生態系保護地域の指定を受けたのを機に福島、山形県内の山岳会、自然保護団体と「吾妻連峰森林生態系保護地域設定協議会」を設立(会長に星一彰福島県自然保護協会長を選任)して、高山を保護地域に組み込むことを林野庁に促すための高山周辺山岳の植生調査を実施していた。1994年は4月にその調査報告書「吾妻連峰」を発刊したばかりであった。その経験から、当時の事務局にも自然を観察する「眼」と「姿勢」が芽生えていたタイミングでの瀬川夫妻との遭遇は運命的と言っても良いかもしれない(もっともその当時の私は瀬川夫妻とは面識がなく、瀬川夫妻の自然観察会の素晴らしさも想像できないでいた)。

山岳の自然観察を中核に据えて「高山の原生林を守る会」の



的場川の春



瀬峰のブナ林



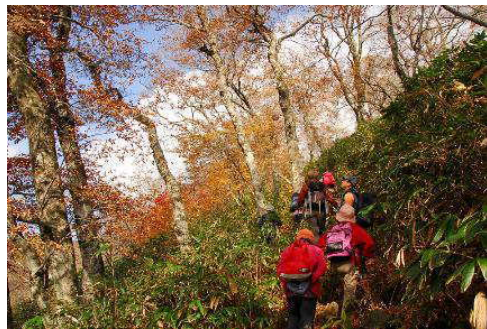
瀬川夫妻 (高山観察会から)

自然観察会が定期的な事業として計画されることとなった。手探り状態ながら、カタクリの会に習って観察会資料を必ず作成することにした。2年後の1997年にはそれまでの観察会の経験を積み上げて纏め「吾妻・安達太良・磐梯山森ガイド」を発刊した。これにより、「高山の原生林を守る会」が高山スキー場反対運動の会に加え、山岳の自然観察会を展開するユニークな会としても認知され始めた。「高山の原生林を守る会」の自然観察会は講師と受講者と言う関係では実施されていない。予定コースの下見と資料作成、人数制限と採取禁止等の安全対策と自然保護に配慮した基本原則以外は観察会のためのマニュアルもない。参加者の感性のみによる観察会と言うスタイルを継続して現在に至っている。こうした20年を超える自然観察会の積み上げの結果、「高山の会」スタイルともいえる自然観察会の雰囲気が出来上がりつつあるように思われる。そして、自然観察会こそが、30年間「高山の原生林を守る会」が続いてきた原動力ではなかったかとの思いを強くしている。

高山スキー場が計画されたのは、当時、ヒマラヤのスキー滑降で名声を博していた三浦雄一郎氏が、高山の山スキーツアーコースを滑降して国際級のスキー場になると発言したことが追い風になったといわれる。しかし、高山を源流とする的場川を遡行して調査してみると1985年の大雨による大出水で流された背丈より大きな岩塊が沢を埋め、その上に流木が横たわっていた。また、その支沢では斜面崩壊により連なった岩塊の上に若いブナが植生していた。これはかつてのカラマツ植林のためにその尾根のブナ林が伐採された弊害であることは明白であった。その樹がなぜそこに根付いたかを観察する姿勢があれば「国際級のスキー場に」などとの発想は起きなかったと思う。

会創立当時、森林を始め、自然環境の保全と保護の世論は高まり、大きなうねりとなり、林野庁では森林生態系保護地域制度や緑の回廊など、自然保護のための行政的施策でも前進が見られた。しかし、30年が経過した現在、環境保護の理念が日本の政治・行政に根付いたと言えるだろうか。残念ながら後退してしまったというのが私の実感である。東京電力福島第一原発事故に対する行政的施策を見ると原発事故が日本の自然環境を広範囲に汚染してしまったとの認識がどの程度あるのか疑問に思うことが度々ある。復興と言う枕詞をつけた開発事業による自然破壊、そして新たな安全基準と言う新たな神話による原発復興を「丁寧に説明して理解を求めた」上で推進される「丁寧な」原発回帰と環境保護置き去りの時計を逆回りさせたかのような施策に、不気味な不安感に襲われる。コンクリートで固めることが国土強靱化とはなんと傲慢な発想なのだろうか。震災と原発事故以来、環境省は第2復興省と化し、震災以前は不況を囲っていた企業が復興、被災者は忘却の闇の中に置き去りにされている。

路傍の雑草に目をやり、その個体がなぜそこに根付いたかを観察することなく、その雑草がお金儲けに役立つかのみでその個性を認めるといった高度経済成長時代と同じ価値観に陥っている傲慢な人間が増えているように思う。この数年、突発的な集中豪雨に福島でも度々見舞われている。荒川の濁流を見る度に高山のブナ林が残されたことに安堵する。そのブナ林がこれからも守られるのか30年後の今、もう不安感が芽生えている。震災が日本の歴史が培ってきた日本人の良心まで破壊してしまったかのようだ。私は路傍の雑草に目をやり、その個性を知りたいと思う専門家が財務と自然保護行政の中核を占める時代の到来を切望する。自然観察会の普及はそのような人間を育成する礎になるのではないかと思う。



秋の高山観察会（第100回）



登山道誘導ロープ設置作業（西吾妻）



大出水で崩壊した的場川源頭部



過去のブナ林伐採で崩壊した的場川

1987年3月5日に福島市が吾妻山麓スキー場開発連絡調整会議を発足させ、その2週間後には「高山のスキー場を考える集い」が開催され、4月15日には「高山の原生林を守る会」が発足した。拙速とも思われる位な迅速さで、会は発足したのだった。すぐに現地を調査し、1988年11月15日冊子「高山(高山スキー場問題を考える)」を発刊した。

開発側・保護側双方共に決定打を欠いた展開で4年が過ぎた1991年4月22日、林野庁より「吾妻連峰」が森林生態系保護地域の指定を受ける。この制度で囲い込まれたエリアは、基本的に伐採・開発が出来なくなる。それには高山のスキー場予定地を、保護ゾーンにする必要がある。調査を徹底的に行い、保護すべきゾーンを提案した。1994年4月1日調査報告書「吾妻連峰」を発刊した。

1994年12月16日第4回設定委員会(最終)が開催され、当局側設定案が承認され、高山も標高1350m付近まで保護区域に編入され、スキー場開発は事実上不可能となった。1995年3月5日第10回観察会が北塩原村二十日平で開催された。今までも観察会は行われていたが、現地調査観察会の色が強かった。しかし第10回以降の観察会は、観察のための観察会であった。以降、四季を通して毎年6回の観察会を経て、2017年3月5日に第150回観察会を迎えた。

こうして考えると、高山山麓にスキー場開発を作らせない反対運動期が第一期、法律的に開発が不可能にする活動が第二期、そして平和が訪れ、観察会を通じて自然の素晴らしさを広げる活動が第三期だった。自然展のキャッチコピー「森を守って、観て、学んで30年」が「高山の原生林を守る会」の活動の姿だった。



新緑のブナ (振子沢)

観察会と共に

青柳静子

「高山の原生林を守る会」を知ったのは、今から10年くらい前でした。その頃、山登りが楽しみになりYさん達とも登りだしました。すると、山で目にする植物の名前が次々と飛び出しました。「高山の観察会に参加すると花の名前も樹木も教えて貰えるよ。楽しいよ。」と、誘われたのがきっかけです。

初めて参加した観察会は、雪上観察会となったのですが、皆さんイキイキ、知識の豊富さに驚きながらも、自然の中での発見を楽しんだのを覚えています。私も参加するにつれ、興味関心も増え、同じ山でも以前とは違う宝の山に見えてきました。見るもの、聞くもの、感じるもの、吸い込むもの、その全てが新鮮です。時には厳しい面も見えますが、自然の中に身を置く心地よさは、どの季節に行ってもいいものです。そんな山への恩返しが出来ればと思っています。

観察会を続けていくうちに、自然と道端にも目が向き、何かを捉えています。すっかり観察スタイルが身に付きました。先日こんな事がありました。いつもの朝の犬の散歩中、降雪後の道を転ばぬようゆっくり歩いていると、あれ？今のは？一度は通り過ぎたのですが、私の目に映った白い物体はもしかして？戻って今度はよく見ると、思った通り越冬中のウラギンシジミでした。成虫で越冬することは知っていましたが、どこにいるやら、今回が初めてです。カナメモチの葉裏にしっかりとまっていました。裏羽の銀白色の輝き、何とも言えません。アオダモの冬芽が鳩羽鼠なら、ウラギンは白鼠でしょうか。美しいです。嬉しいです。朝一番のご褒美を頂きました。また、観察の楽しみが増えました。自然界のこと、心配も尽きませんが、どうか春まで無事に生命を繋いでほしいものです。



ウラギンシジミ



ヒメギフチョウ

「目からウロコ」の観察会

佐藤清子

自然の中にいると、なぜか気持ちが落ち着きます。若い頃は緑の山々や紅葉の山を歩き、高山植物に出会うことで自然を満喫していると感じていました。

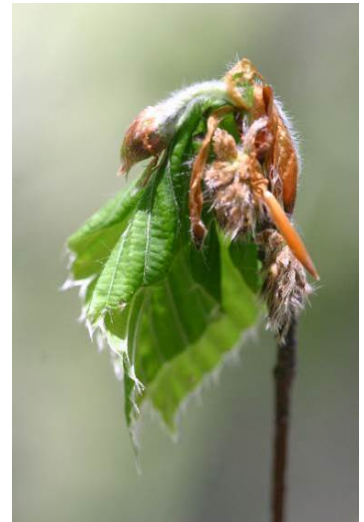
そんな私が、高山の原生林を守る会の観察会に参加するたびに、「目からウロコ」の思いをしています。毎回、登山道の草花や樹木を観察しながら、その特徴を教えてもらってそれまで自然を漠然としか見ていなかったことを思い知らされます。例えば、ブナの木に可憐な花が咲くこと、雌花と雄花があることも観察会で初めて知りました。観察して違いがわかると、今まで見えていなかった世界が急に広がってきます。

春先、発芽したてのブナの赤ちゃんはみずみずしい生命のエネルギーを放ち、冬芽がほころんで芽吹いたばかりの若葉は、柔らかな産毛が逆光に輝いています。夏、ブナの高木は、黄緑色に繁る葉が重なり合って強い太陽の陽射しから守ってくれ、秋、夕陽を浴びたブナ林を歩くと黄金の光に包まれて至福の時に浸れます。木枯らしの冬、ブナの木に熊の爪痕や熊棚を見つけては冬眠のために必死でブナの実を食べている熊を想像して楽しめます。

足元に咲く小さなスミレの花や苔類をルーペで覗くと、3Dの神秘的な世界に引き込まれ、脳裏にその映像が焼き付くから不思議です。まるで不思議の国に迷い込んだアリスになった気分です。森のひとかけらを知ることから、森の中が輝いて見え、自然の生物たちの営みがより身近に感じられるようになりました。

高山の観察会は、いつも大らかで植物学に詳しいリーダーのお蔭で、気さくに何回でも聞ける雰囲気が好き、新たな発見を見つけては、次回を楽しみにしています。

30年間も活動を続けてこられた発足当時の先輩会員の方々の信念に思いを馳せ、私も森歩きの楽しさを伝えながら、自然を保つ活動に参加したいと思いました。



ブナの若葉（振子沢）

高山を守る会30周年おめでとうございます

佐藤久美子

30周年おめでとうございます。

私が入会したのは、41歳の時、それから月日は流れて、今年は、めでたく還暦を迎えます。20年間高山の会にお世話になった事になります。自分で書き留めていた山行き記録を1ページずつめくると、観察会で登った山の名前が次々と出て来て、色々思い出されます。数えてみたら、88回参加していました。それと共に、沢山の方達との出会いもありました。観察会では、いつも、新鮮な出会いと驚きと自然の力強さを感じて、身も心もリフレッシュして更に、お腹も大満足で、楽しい時間を過ごすことが、出来ました。特に、冬の季節は、白銀の世界のフカフカの雪を踏みしめる感覚のわくわく感。春先の芽吹き的美しさは、ルーペを覗きこむと、まるで、別世界に飛び込んだ様に、自然の美しさと思議に驚くばかりである。

今は、母の介護があり、参加出来ずにいますが、これも、大切な時間と思い、毎日を過ごしています。自分では、体力は有るほうだと、思っていました、が、メンタルと胃がやられて、体がヨボヨボです。それでも、1つだけ継続していることがありますよ。朝の散歩です。2月3日節分の日、いつもの様に、阿武隈川のサイクリングロードに、向かって歩いていると、な、なんと、眼の前にゆきまくりが2つ転がっていました。「うわー」と叫んでしまいました。サイズは、23センチ程。今日食べる予定の太巻きの様、上手く巻いています。この場所で、見れるなんて、物凄いラッキー。きっと、昨日の雪と土手の斜面と強風がコラボしたのかな？あんまり可愛いので。拾い上げて、しばらくの間、持って歩きました。

そんなこんなで、観察会に行ける日を、楽しみに、皆さんに会える日を妄想しながら。これからも、末永く観察会が存続出来ますようにと願いながら。

30年間、ご苦労様でした。そして、有難うございます。



カタクリとオトメエンゴサク
(斜平山)

30周年に思うこと

小幡仁子

「高山の原生林を守る会」が創立30周年を迎える。創立20周年の時も「自然展」をして、その時に私は自分で草木染めしたタペスタリーを展示したから、あれから10年経ったと思うとその速さに驚くばかりだ。創立当時は、吾妻高山にスキー場ができれば大規模な自然破壊が起こるということで反対運動をしていた。私もその趣旨に賛同し、会員となった覚えがある。また、その頃一緒に山を登っていた友達も「高山の会」の推進メンバーになったり、会員になったりした。その後、私は福島市を後にし、子育てに忙しく、会の活動に参加することは途絶えてしまった。子どもの手が離れ、また山に登ってみたいと思って昔仲間に声をかけたら「高山の会」がまだ続いていたのだった。その頃はスキー場建設の話はなくなり、会の中心は自然観察と吾妻の自然保護活動になっていた。

「自然観察」って何かな？と思って参加したが、これがとても楽しかった。ルーペを通して見る芽・花・実の世界は実に美しく不思議である。それまでは単に「スマレ」であった物が、春一番に咲くアオイスミレから始まり、ヒナスマレ、アカネスミレ、マルバスミレ、エイザンスミレ、マキノスマレと、次々に咲くスマレの違いを楽しむことができるようになった。花の色・唇弁の紫条・花びらの形、それぞれが違っていて本当に魅せられてしまう。私は地元鹿狼山があるが、春はスマレの花との出会いを楽しみに登っている。

また、秋になれば吾妻の山々は紅葉の季節となる。ウリハダカエデのグラデーション、コミネカエデの燃える赤、ミネカエデの真っ黄色、ヒツバカエデの透き通る黄色。金色に輝くブナの黄葉は素晴らしい。そして冬は、霧氷や雪の花に飾られた樹々が私たちを迎えてくれる。芽鱗の中には幼い花や葉が眠っている。

「自然観察」を始めるようになってから、自然にあるものの息づかいが身近に感じられるようになった気がする。もし年老いて動けなくなっても、私は花を想い、紅葉の色を思い返し、豊かな心で生活したいと思う。四季折々美しい風景のある日本に生まれたことを感謝しながら・・・



サクラスマレ



マルバスミレ



アカネスミレ



マキノスマレ



アオイスミレの紫条



くかがやく
土の道がれ場に変り目前に吾妻の岩肌白
雲とわたすげ
朝靄に夜明けの光さしはじめ池塘色どる
面に映す光の音符
木漏れ日がルンバのやうに揺れながら水
符の昼食を終ふ
傘を打つ霰の音はクレッシェンド十六音
ビソの球果映えくる
雨空をしばし分け来る光り受けオオシラ
岩を打ち飛び散る水にうつすらと短き虹
がかかりては消ゆ

木漏れ日

山口 嵩

「高山の原生林を守る会」の由緒ある会員になったこと

渡邊アヤ子

高山への登山コースはいくつかあるが、昨年秋、私は初めて土湯温泉から麦平を経て高山に至るコースを歩く機会に恵まれた。

土湯温泉から不動湯方面へ車で十数分、林道のゲートから歩き始める。秋たけなわの休日というのに登山者は私達だけ(佐藤代表と女性3人)。行楽地の喧騒をよそに静寂な空間の中にミズナラやカエデの紅葉が青空に映え、あたりの甘い香りにふと足を止めると丸みを帯びたカツラの葉が落葉していた。

やがてやせ尾根(通称フンドシ)に上がるとブナの巨木が次々と現れた。しばし休憩、ブナの木の下で穏やかな時間が流れていく。木々の間からは雄大な箕輪山や鬼面山、反対側には吾妻のゆるやかな山容が広がっている。

標高が上がるにつれ、ブナからやがてコメツガ、クロベ、オオシラビソと、次第にうす暗い針葉樹林帯に分け入っていく。樹木のところどころにスキーコースの錆びついた案内板が掛かっており、かつて知人ぞ知る山スキーツアーのメッカであることがうかがわれた。

しばらく歩くと一転、チシマザサが生え茂る明るい湿原が現れた。ここが標高約1500メートルの麦平である。湿原には池塘が広がり、水底に揺れているのは吾妻山固有種のアヅマホシクサとのこと。夏の終わりには透明感のある白色の小さな花が池塘に群生するそうである。

登山口から麦平まで標高差は約800メートル。これだけの間に樹木の分布の変化が顕著に見て取れるのは非常に貴重だと聞いた。

30年前、このすばらしい原生林がスキー場開発の危機にさらされた。それをくい止め、守り、残すために反対運動の中心になったのは、登山愛好者だけではなく一般市民の力だった。今を生きる者として、私達はその精神を忘れることなく、次の世代に引き継がなくてはと切に思う。

麦平からは針葉樹をまとい黒々とした高山がどっしりと座し、池塘にその姿を映していた。私達はそこで十分に満足であった。そして、同行していただいた佐藤代表に「あなたはこのコースを歩いて晴れて『高山の原生林を守る会』の由緒ある会員になりました」とのお墨付きをいただいた。入会して今年で6年目になる。



高山と麦平

「高山の原生林を守る会」創立30周年に寄せて

佐藤和重

高山を守る会創立30周年おめでとうございます。

私がこの会に入会したのは12、3年前です。もうその頃には会の当初の目的である高山のスキー場建設反対運動は終わっており、自然観察会、鳩峰峠の牧場跡の植生回復、吾妻山の登山道のロープの設置、回収が主な活動でした。

冬の観察会では、動物の足跡、木々の冬芽を楽しみ、早春にはスプリングエフェメラル、盛夏には高山植物、秋には紅葉と恒例の芋煮、晩秋には里山観察と四季折々に楽しませていただきありがとうございます。

一番思い出に残っているのは、やはり初めて参加した奥土湯の大ブナの観察会です。しとしと雨が降る中、数十年前までは地元の人の生活圏(炭焼きの跡)であったであろう小道をブナの樹幹流などを観察したどり着いた大ブナ。観察会でしか来られないような場所。まるで幽玄の世界に静かに、そして威厳をもってたたずむ大ブナの存在感到に圧倒されました。それまで、観光地化された自然しか知らなかった自分には衝撃でした。

いつかまたあの太い大ブナに会いたいと、いつも心の片隅にありましたがなかなか実現しませんでした。

しかし2014年4月再び観察会でそれは実現しました。訪れた大ブナは天寿を全うし、佇んでいました。しかしそこには、天は明るくその足下には確かに何十年、何百年後に次世代を担う実生たちが競い合っているはず。

その実生達が成長できるような環境をこれからも大切にしていきたいと思っています。



大ブナの傍らで

はじめての観察会と植林

白澤和子

B5 のチラシに中吾妻山観察会「秋のブナ林観察会」のご案内と題し、1995 年 10 月 15 日高森ドライブイン集合とあります。初めてクマ棚をみたのはここでした。

しかし、最初の参加は、その一年前の秋の二十日平のような気がします。たつぷりと森の中を歩いた気持ちよさを忘れられません。ふわふわのクッションが足裏に伝わる山道が続き、ブナの広場に着くとお弁当。錦繡にすっぽりつまれて目、耳、鼻、肌そして血めぐりまで喜んでいました。「緑の回廊」を教えていただいたのもこの頃です。この山の大地も花も樹も小鳥も猛禽も虫も獣もそして人間も同じ生物。奥羽山脈が東北の背骨となってそれぞれの命が棲み分け連鎖し共生していると知りました。以来、私は生きものの一個体としてほどよい在り方、生き方を想うようになりました。

そして 2002 年 6 月、鳩峰峠の植林に参加しました。目の前に開けた急斜面の荒涼とした風景、それが、戦後鳩峰牧場として開拓された牧草地でした。谷から聞こえてくる水の流れは摺上川の源流です。県境の山奥を開墾する苦労は大変なことだったでしょう。そこで生きた人たち、そして捨てたのです。その跡地を今、ボランティアの手で植林して緑の回廊でつなぎ市の水道の源流をも守ろうとしています。三年を経て行ってみましたら枯れてしまった木もありますが、葉を伸ばしている木もあります。どんな生きものも、まして木々たちなら一層その成長は遅々として長い年月がかかりそうです。100 年……かかるのでしょうか。会員歴は長いのですが、観察会の参加が少ないいうえに花や木の名前をおぼえることもできないままに老いてしまいました。それでも会の活動が私に気づきを与えてくれよき道しるべとなっています。少しずつ、いつの間にか心身を満たしてきたふんわりした不確かなものが、私を確かなものへ近づけているような気がします。次の 10 年、いえ来年もどうぞよろしくお願いします。



植林作業

高山開発の裏話

河上鏐治



高山山スキーツアー標識

当時私は日本山岳会に所属し、福島県山岳連盟の役員でした。日本山岳会には「環境保護委員会」なる組織があり、全国の支部に自然環境破壊の実態調査を依頼しました。福島では高山の国際級スキー場の開発計画が持ち上がっているが、福島支部からは「開発による自然破壊はない」との報告をしていました。これに対して知り合いの本部委員から私に個人的に実情を知らせてほしいとの連絡がありました。福島では開発反対の「高山の原生林を守る会」が結成され、署名活動と現地調査を行っている旨を知らせました。本部では東京でも署名活動を行い、現地調査もしたいと連絡があり、日本山岳会アルペンスキークラブ員（私も加盟しています）による高山スキーツアーが企画され、吾妻小舎で吾妻山

の会員などとミーティングを開き、高橋淳一さんが詳細の説明をいたしました。これに参加した元朝日新聞編集委員の本多勝一氏が週刊誌に彼一流の過激な言葉で反対論を載せてくれました。

日本山岳会福島支部の保護委員は主として夫々の山の麓の温泉旅館の主人で、自分たちの生きる道として必死でした。しかしその実態は、中央のディペロッパによる第三セクター設立のために利用されているのです。

これに対して市の動きはどうか。市議会で最初に採り上げたのは共産党議員で、共産党の採り上げた議案には他の会派では追従はしないとの暗黙の取り決めがあるそうで、それ以後は問題にされず、市長の独走を許しました。しかしブームが去ると、あちこちのスキー場は不況のため閉鎖され、その付は第三セクターに利用された地方自治体に押し付けられ、市町村は赤字に苦しんでいます。福島はセゾンが手を引いたのを機会に開発計画を断念し、反対運動のおかげで、市長の首が繋がったといわれています。



「守る会」の原点北限のシラビソと高山

高山の恵み

五十嵐 礼子（稔 加筆）

私は福島市の西部の仁井田という地区に住んでいます。この地区は福島市の中心部に比較的近く、吾妻山系を源とする荒川の流域で農業調整区域が多く残っており、昔から果樹と水田が多い地域です。私のうちからも安達太良山系から高山、吾妻山系が一望でき毎朝、窓を開け、高山に「おはよう」とつぶやく。私の挨拶です。きっと会員の中でも一番多く、高山を見ていることと思います（本当に目の前に見えるんです）。

早朝うちの近辺を散歩するのが私の日課なのですが、冬の今ごろ（2月）は、私の目ざめと日の出が同じ時間帯で、鳥のさえずりや白い吾妻の山々の凜とした姿を見ることができる美しい季節です。（ふゆは、つとめてですね）そしてこれから、だんだん春が近づき、吾妻の山々から雪解け水が流れ出し、荒川の流れとなっていきます。荒川の流れは、福島盆地の田畑の水となります。

実は福島市は、わたしたちが感じているよりも降水量が少なく、全国の県庁所在地の中では37番目ということです。福島市の降水量だけでは、福島市での田畑の耕作は不向きという話を聞いたことがあります。しかも、福島市の西側には水田用のため池もダムありません。しかし好天が続く、長いこと雨が降ることがなくても荒川の水が枯れることはありません。この荒川のおかげで、福島市の田畑の耕作は（特に福島市西部の）なりたっているとも思われます。つまり、吾妻の山々、高山などのおかげともいえるかと思います。

先日の観察会で高山の山々を歩き、男沼、女沼、仁田沼巡りをしながらその保水力の素晴らしさに感心しました。私たちはこの山々からの恵みの水で水田を耕し、米を作ります。水田は地下に水を戻すことができます。稲作は自然のサイクルの一部です。吾妻の山々からいただいた天の恵み、水を大切にしたいと思います。

あと一つ、私のうちの近くには福島市のごみ焼却場があります。ごみ焼却場は釜の冷却のため水が豊富なところに建てる必要があるそうです。山からの水の恵みと環境問題という観点からするとごみ処理ということは少し違和感があるのかもしれませんが、いわば福島市のごみも吾妻の山々からの水のおかげでごみをうまく処理できているといえるのかもしれませんが。ごみの処理ということは私たちが生活していくうえではけっしてないがしろにできない問題ですから。

私たちは森好き、自然好きの同好の集まりです。生活を守るため山林の恵みに感謝しながら楽しんでいきたいと思っています。

「故郷の山に向かい、ということなし

故郷の山はありがたきかな」

高山や吾妻の山々、ありがとう。



高山遠景と荒川

高山の原生林を守る会会報100号に寄せて

長岡由江

高山の原生林を守る会、30周年おめでとうございます。

私が初めて参加させていただいたのは2015年4月霊山のスプリングエフェメラル観察会でした。だらだらと草花を愛でて歩くだけ・・・しかも“スプリングエフェメラル”春の妖精たちとの出会いにわくわくしながら、即参加をきめました。だらだらだけとはいきませんでした、美しい妖精たちとは出逢えました。しかも会の皆さまの広く深い知識にも驚くばかりでした。知らなかったことを知るというのも楽しいことです。

残念ながら教えていただいた事は頭に留まらず・・・ごめんなさい。けれど心には深くしまわれました。

松井食堂といわれる豪勢な食事にも驚かされました。いつもご馳走様です。数える程しか参加させていただいていないのですが、中でも忘れられないのは雪のぶな林歩きです。雪に覆われた林の静けさの中で、すでに木々は芽吹き準備を整えており、きつねやうさぎ、ひめねずみなどの足跡等々・・・静けさの中、生命の気配は賑やかでした。また、林の木々の間から仰ぎ見る青空など美しさ満載でした。

これからも皆さまとご一緒に小さな妖精に出会える“だらだら歩き”を楽しみにしております。



一泊での蔵王登山だった。遠刈田から不忘山へ、午後の出発が数時間をして牧場のような場所となつて、道をたどれば牧草の緑の一部が雨に流されて赤土と妙趣の広場のようになっていた。これから登山路は森林地帯に入ろうとしている。そして、それならと思うことがあつた。今晚の宿はここがいい。土は渴き温くもっている。そしてなんと広々とした眺めだろう。身を隠すだけの小さなツエルトを張った。一汁一菜の簡単な食事、あとはゆっくり夜がくるだろうと、ぼんやり。と、ヨタカの声が聞こえた。夕日がさよならの挨拶を大地や緑へ投げかけていた。そして突然間近でキョキキョキキョ。ツエルトの入り口をそつとあけた。目の前の数歩のところにはヨタカが座っている。賢治はヨタカの顔は味噌をぬったように、顔も体もまだらな醜い鳥と表現して、物語のヨタカの憐れみを深めているが、目の前のヨタカは体のまだらが砂礫の保護芭となつて、目を外せば姿を見失いそうになる。人の気配など知らないのだろうか。呼びかけのキョキキョキョを包んでやがて黒い帳が下りてきた。ここはきっとヨタカの領域だったのだろう。こんなところに寝る人などいやしない。しかしそれならばの因があつての、ヨタカや野生との出会いだろう。



海や山が時折無性に恋しくなることがある。そんな時は一人で海や山に行つて一本の樹や一匹の獣のようになつて眠りたいと思う。島で漁火を見ながら、また行き暮れて山の途中に寝たことも何度もあつた。粗末な寝床に途中何度も目覚める。星と月の位置がそのたび変わっている。星空をメリーゴーランドと思つたりする。巡っているのは、この地上全体のようにも思う。隠れようもない、その間にあつて私は服を着た一匹の猿人である。

人は 30 億年前海水の一滴を掬つて生まれた一個の細胞の子孫も永遠宇宙と共鳴し運行をともしする微細衛星でもあろう。一人の夜にそのことがかすかでも感受することはできないか。ヨタカよ、お前も一つの星。命の仲間。命の区別のない世界が思われれば、心は優しくなっている。

自然を敬う

丹治計二

虫たちはね 祖たちの生まれ変わり
 神さまとんぼは虐めてはいけないよ
 川には神さまがいるのだから
 オシロイをすればチンポが曲がるよ
 トイレを掃除する子は
 神さまがベツピンさんにしてくれる
 そのことを本当のことだと思ふ
 因果応報
 どこに因があり どこに果が現れるか
 問うこともなく
 日の出が届けば
 明るくなる心のように
 自然とは自分のことだつた
 あらゆるものに
 神仏が添っているならば
 心は和やかであつて欲しい
 そこが荒んでおれば 人も ものたちも
 他を顧みない心で生きるだろう
 やましさがなくことに
 素朴な心の規範があつた
 頂いたものには
 お返しをすることも務めだつた
 そうしたお返しには
 山川草木を敬うことも含まれていた



チングルマのささやき

松井 さき子

今ここは2000mのところなの

雪が解けて暖かくなり、私達は白い花を開くところなの
仲間もたくさんいて寂しくないけれど

困っている事があるの

私達の側に来て、土手を崩していく人達がいること

写真を撮ったり、休憩して踏んずけていくのよ

私たちを綺麗に写してくれるのは嬉しいけれど

住むところがだんだん削られていくのは悲しくなるの

でもね、春になるとロープを張りに来てくれる方々がいて

私達仲間も少しずつ増えてきたよ

イワカガミさんも、ヒナザクラさんも、またワタスゲさんも

大変助かっていると感謝してましたよ

皆さん、もつともつと甘えていいですか？

これからも、ずーとずーと私達を守りに来てね

待っているよ、感謝をこめてお願いね！



田崎裕子テンペラ画展



会期：2017年5月3日(水)－8日(月)

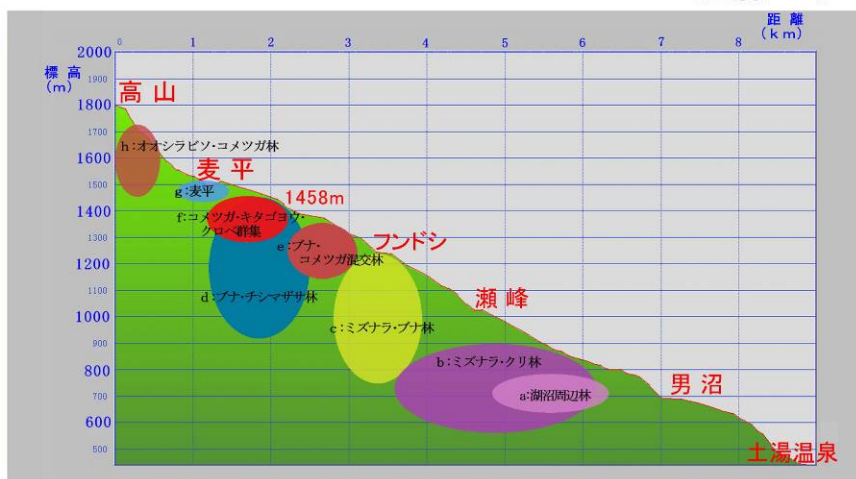
会場：松屋銀座 7階 特別室

写真で見る高山山麓から頂上までの植物分布

佐藤 守



高山(たかやま)は吾妻連峰の東南端に位置し、標高1805mの森深い山です。土湯温泉から高山の山頂までと標高に応じてさまざまな森林が発達しているのがよく分かります。ここでは高山の森林を8つに区分し、その特徴を解説します。



高山 高度分布図

a 湖沼周辺林 (溪谷林、河畔林、湿地林)

(タマブキーケヤキーヤマタイミンガサ群集)

女沼、仁田沼、男沼から楯森東斜面にかけては、湿地帯が散在する。湿地のハンノキ林や露岩帯に発達したケヤキ林が見られるのは吾妻山麓ではこの一帯に限られる。ハクウンボク、ウリノキ、コクサギ、アワブキなどの個性的な樹木も植生する。

タマブキ

コクサギ

ダキバヒメアザミ

エゾアジサイ



ハクウンボク

ウリノキ

ミズバショウ

キクザキイチゲ

b ミズナラークリ林

高山山麓の湖沼森を包括する森林である。福島県内においてブナクラス域下部に広く見られる落葉広葉樹二次林である。植生種は太平洋側の要素が多い。頻度は低いがブナも散在する。その大半はアカマツやヒノキの植林地となっており、自然植生が認められるところも伐採後に形成された二次遷移林である。林中には炭焼き釜跡なども確認でき、人間との深い関わりが感じられる。



コナラ



アオハダ



ウワミズザクラ



アズキナシ



ウラジロノキ



キブシ



ヤマツツジ



カタクリ



アケボノスミレ



ウリハダカエデ



アオヤギソウ



炭焼き跡



エゴノキ



ヤマモミジ



カジカエデ



c ミズナラ-ブナ林

瀬峰を経てフンドシと呼ばれる痩せ尾根に至る緩斜面に広がる森林である。ブナがミズナラと隣接している景観が見られ、ミズナラからブナ林へ遷移する過程にある森の営みを実感できる。



d ブナーチシマザサ林

フンドシから森林生態系保護地域保全地区の標識が立つやせ尾根辺りまでは、ブナの壮木が林立するほぼ純林的なブナ林である。このほかに、900m付近から振子沢を横断した場川に至る一帯（通称ブナ平）、前山(1611m)中腹の1450m付近から1320m付近の的場川源頭部までにも純林的なブナ林が存在する。



e ブナー・コメツガ林

森林生態系保護地域保全地区の標識の先の急登を越すとヨコワサルオガセをまとったブナが現れ、暫らくはコメツガとブナの混交林となる。ここから麦平までは、コメツガが優占種である。コメツガは不安定な土地や環境で林をつくる性質が強く、ブナ帯まで下降して土地的極相としてコメツガ－ブナ林を形成することがある。



f コメツガーキタゴヨウクロベ群集

傾斜がゆるくなり、安山岩の巨岩が現れるようになると、ブナに代わってオオシラビソやキタゴヨウが目立つようになる。1450m付近にはクロベやシラビソのコロニーが認められる。本来、日本の亜高山帯の針葉樹林は露岩地から土壌が安定するにつれてクロベ・コマツガ・オオシラビソに変遷するとされている。この一帯の林相は極めて自然度が高い。



g 麦平湿原

鬱蒼としたクロベ林を過ぎるとダケカンバやネコシデが目につくようになり、チシマザサに覆われた登山道から、一気に視界が開け、湿原が目の前に現れる。標高1531m、高山のオアシス、麦平である。



h オオシラビソ-コメツガ林

麦平からは露岩帯に形成されたオオシラビソ林の急登となる。林中の大きなこぶを持つダケカンバは壮観。頂上ではシラビソが混生する。



第 151 回自然観察会案内：蟹ヶ沢・スプリングエフェメラル観察会

日時：2017 年 4 月 30 日（日）7:30～15:30

集合場所：四季の里交差点正面入口駐車場 集合時間 7:30 参加定員 20 名

内容 蟹ヶ沢周辺の湿地と残雪のブナ林を散策し、吾妻に春の訪れを告げる森の表情を観察します。
準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、手袋（軍手複数）、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳

*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用：保険代（500 円）

申し込み：4 月 29 日（土）まで佐藤守（024-593-0188）へ電話またはメールにてお願いします（電話申込は午後 7 時～9 時でお願いします）。

第 152 回自然観察会案内：高山（瀬峰）・新緑のブナ林観察会

2017 年 5 月 14 日（日）7:30～15:30

集合場所：四季の里交差点正面入口駐車場 集合時間 7:30 参加定員 20 名

内容 高山の瀬峰からフンドシに至る一帯に広がる新緑のブナ林を散策します。

準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、手袋（軍手複数）、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳

*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用：保険代（500 円）

申し込み：5 月 13 日（土）まで佐藤守（024-593-0188）へ電話またはメールにてお願いします（電話申込は午後 7 時～9 時でお願いします）。

西吾妻登山道誘導ロープ設置ボランティア（NF 米沢と共同：詳細は佐藤守まで）

1. 実施日：6 月 17 日（土）6 時 30 分～17 時 30 分（雨天時 6 月 19 日に順延）
2. 定員：10 名（山岳での行動において自己管理のできる方）
3. 内容：天狗岩～西吾妻避難小屋湿地帯（A コース：6 名）と西大巓水場周辺（B コース：4 名）の誘導ロープの設置作業を行います。
4. 集合場所・時間：13 号線旧でん六跡駐車場 6 時 30 分
5. 参加費：1000 円（ゴンドラ・リフト代の 1 部を負担願います）
6. 申し込み：6 月 16 日（金）まで佐藤守（024-593-0188）へ電話またはメールにてお願いします（電話申込は午後 7 時～9 時でお願いします）。1000 円（ゴンドラ・リフト代の 1 部を負担願います）

吾妻山の自然展

主催：高山の原生林を守る会

日時：平成 29 年 5 月 17 日（水）13:00 - 平成 29 年 6 月 13 日（火）15:00

場所：福島大学図書館本館 1F 資料展示エリア

内容：3 月 27 日～4 月 2 日に開催された 30 周年記念・自然展に展示されたポスター、写真を展示します。

5 月 17 日 9:00 から準備をしますのでお手伝いできる方は佐藤までご連絡をお願いします。

【編集後記】■30 周年・自然展には 200 人を超える方々に訪れていただきました。観察会資料や高山スキー場反対運動の際にまとめた調査資料等は 2、3 日で底をついていました。30 年の月日が経つと高山の存在場所や高山スキー場計画について知っている方は、少なくなっているようでした。それでも自然観察会などの今の会の取り組みに興味を持たれる方もおり、励まされました。今回の自然展が自然観察会の普及のきっかけになればと願っています（MS 記）。

新年度の会費納入をお願いします：郵便振替 02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」へ

「高山」高山の原生林を守る会会報 第 100 号 2017 年 4 月発行

編集・発行：高山の原生林を守る会 HP：<http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>

代表連絡先：佐藤 守 Phone 024-593-0188（夜間 7 時～9 時）

郵便振替：02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法：年会費（500 円）を添えて上記まで

編集：佐藤・奥田・小幡